

I. 博物館学芸員教材の枠組み

須藤 護

(1) 学部教育教材の枠組み

ビデオパッケージによる学部教育教材「博物館学芸員の仕事」は、平成4年度に企画案の検討がなされ、平成5年度から制作がはじまった。この教材制作計画は、放送教育開発センターの内部的な改組によって、教材研究室が誕生し、学部教育教材の研究開発にたいする基本的な姿勢、方法論等の枠組みをいかに設定するか、というところから出発した。

大学における学部教育は幅が広く、しかも、個別的には高い専門性が要求されるために、教材研究室のスタッフではとても対応できないことは明白であった。したがって、高等教育機関から教材制作の要望があったとき、また研究公募によって教材制作の応募があったときにこれを採用し、外部の研究者と教材研究室との共同研究、共同開発をすすめていくことが了解された。東京大学の英語教材はこの路線で開発されたものである。

そのような状況のなかで、教材研究室が独自の視点をもって、また独自の方法論をもって、学部教育教材を研究開発する、という姿勢も必要であった。そこで、現在のスタッフで制作可能な教材について、検討が加えられてきた。幅広い分野のなかで何を優先し、何を落としていくかといった議論の結果、次の2点が優先されることが確認された。

第1点目は、資格取得にかかわる教材が優先されることが望ましいという意見である。学部教育教材に先行して、制作がおこなわれている教師教育教材は、その制作目的の一つが資格取得に深くかかわっており、これと同じ路線で研究開発を進めていくことが望ましい、という意見が多くを占めた。第2点目は、映像が有効に発揮できる教材の開発である。言葉で何度も説明しても理解しにくいものでも、映像をみせることによって、より理解を深めていくことは可能であり、この映像の特性と手法を有効に利用しようというものであった。

資格取得に密接にかかわり、映像の特性を教材のなかに生かしていく、という2点をキーワードとして、学部教育教材の研究開発の大きな枠組みが決定した。その枠組みの中で、教材研究室の現状のスタッフで研究開発が可能な分野が博物館学芸員教材であった。このほかに図書館司書、あるいは福祉関係の仕事に従事するために必要な諸資格など、資格を必要とする分野は多いが、この方はある期間の研究期間において、年次計画のなかで検討を加えていくことにした。

博物館学芸員の資格を取得するためには、教員と同様、現場での実習が要求される。学生は博物館にいて、学芸員がおこなう仕事の説明を受け、その作業を実際に体験しながら仕事の内容を理解し、さらにその目的や意味を理解するというのが博物館実習の目的である。このような仕事の内容は、映像で表現することによって、より理解を深めることが可能であり、映像の特性を充分活かすことのできる要素である。学部教育教材の研究開発の手始めに、博物館学芸員の仕事を選んだのはこのような理由からであった。

(2) 博物館学芸員教材の枠組み

1. 博物館学の教材の必要性

さて、ひとことで博物館学芸員といっても、その範囲は非常に広い。博物館で扱う学問分野も、人文科学系では考古学、歴史学、民俗学、文化人類学、美術・工芸、自然科学系では植物学、生物学、地質学、天文学などがあげられ、この範疇に入りにくい分野も少なくない。一般的には、これらの分野を総合的に扱った総合博物館がなじみの深いものであるが、そのほかに専門博物館として、各分野がこまかく枝わかれしている。たとえば人文系を例にとってみると、農業博物館、紙の博物館、灯火博物館、雪の博物館、蚕糸博物館、玩具博物館、民家・集落博物館（野外博物館）などがある。

これら博物館にかかわる映像教材は、現在放送大学で開講中である「博物館学Ⅰ」「博物館学Ⅱ」をはじめとして、博物館に関する出版物や展示事業などにかかわっている企業が、博物館建設計画、展示計画などを軸にしたノウハウものを手がけているが、学芸員養成のための教材は皆無であるといっている。放送教育開発センターで手がける場合はこの点を重視すること、さらに、これら先行している教材と内容が重複しないこと、そしてこのセンターでなければできない教材を制作するという方針をたてた。その結果、博物館学芸員がおこなっている実際の作業をとおして、学芸員の日常の研究活動や、博物館での実務などを具体的に提示することが重要であるという認識にいたった。

次に問題になったことは博物館学芸員のどの分野を優先させるかということであった。先に述べたようにこの分野は大きくわけて、自然科学、考古学、文化人類学、民俗学、美術工芸等がある。このうち博物館学芸員の仕事として、調査・研究、資料整理、資料管理、展示等が、体系的におこなわれている分野が自然科学、考古学、文化人類学等であり、逆にその体系が整っていない分野が民俗学であることが次第にわかってきた。

したがって、この分野ではそれぞれの博物館に所属する学芸員が、それぞれの流儀で、また当該博物館の伝統的手法を継続する形で日常の業務をおこなっている。そのため博物館相互における資料の比較研究をすることがむずかしいという。

さらに極端な事例ではあるが、調査、記録、および資料整理等の手法がむずかしいために、貴重な民俗資料を放置している例も少なくない。

一方、学芸員コースでの授業においても、各大学が担当教官の経験、手腕、授業に対する創意工夫に頼っているのが実状であった。

以上のことが今回の教材制作をおこなうきっかけになったのであるが、これらの現状を踏まえた上で教材制作をおこなうことになる。ただし、民俗学系博物館学芸員の仕事の見本的な教材を制作するのではなく、一つの事例を提示することで、方法論の検討ができるような教材、つまり教材のたたき台を作ることによって、学芸員の仕事の幅の広さや可能性を見いだしていこうという試みでもあった。

2. 研究会による成果

教材開発・制作の出発点として、当該分野に関する専門家集団による研究会を開き、先に示した内容の研究を重ねていくことが、これまでの教材研究室でおこなってきた方法であっ

た。学部教育教材においてもこの方式をとることにして、平成5年4月に、民俗学の分野において専門としている国公立大学の教官、及び各学会に所属している研究者等、専門家による研究プロジェクトチームによる共同研究開発体制を組織し、発足させた。

この研究会でおこなう主要な問題は、教材の内容に関わる研究、そして映像による表現方法の研究である。そこで、博物館学芸員養成課程における教授内容について、基本的に欠かすことのできない要素（具体的には博物館学芸員の仕事にかかわるもの）を抽出する。その要素に基づいて必要とする映像の効果について討議を重ねる。そのために必要とされる映像作成のための素材の確認、調査、効果的な撮影方法、編集方法の研究、及び一連のカリキュラムの中での使用方法等の研究をおこなうことが確認された。

プロジェクト発足当初は、博物館学芸員養成課程における基本的な問題について、自由な話し合いを継続的に行ない、そのなかから、なぜこのような教材の制作が必要なのか、教材の制作上何が重要なのか、どのような点に注意していったらいいか、どのような使い方ができるか、などの問題についてできるかぎり煮詰めていくことを試みた。ここでの方式は、ブレインストーミングをすることによって、研究協力者の先生方（平成6年度は客員教官）にどんどん意見をだしてもらい、どのような意見であっても記録にとどめ、それを項目別に分類して集約していく方法である。

その項目は「教材制作の必要性について」「博物館学芸員の仕事とその役割について」「教材制作の姿勢」「教材制作の方向性について」「テーマに関する提案」「テーマ試案」等の問題について分類することができ、個々の問題について議論をつめていく作業になった。基本的な問題として博物館学芸員の仕事と、博物館の役割等について話し合った結果はつぎの通りである。いずれもたいへん幅が広く、奥の深い問題であった。

以下、話し合いの内容を項目別にわけて提示していく。文末の氏名は発言者の氏名である。なお（教材）は教材研究室の調査の結果をかけた。また多少重複する部分があるが、今回の教材制作の基本になる意見が多いのでできるだけ掲載することにした。

＜教材制作の必要性について＞

- ① 現在、地域博物館や郷土資料館では、歴史、民俗をどうとらえていくかという基礎的な積み重ねが、美術、自然科学等の分野と比較して立ち遅れている。博物館や教育の現場ではそのような問題についてかかわっていくことができにくい状態であり、人材が手薄なこともあって、悩んでいる館が少なくない。そのような意味で今回の企画は評価できる。（田村）
- ② 学芸員コースの授業において各大学によって、また各担当教官によって、その教授の仕方が異なっており、共通した教材がない。学生を指導する場合、共通教材が必要であるかどうかについては議論の余地があるが、たたき台になる教材があることが好ましい。その教材を用いて授業することによって、多少なりとも幅広い視野にたつことができる。（田村）
- ③ 自分の専門分野以外の分野について教授する場合は、基礎的な仕事の内容を示した映像教材があれば、それを応用して教授することが可能である。（教材）

〈博物館学芸員の仕事とその役割について〉

- ① 博物館学芸員の仕事は大きくわけて三つある。資料収集から保管までの作業、調査・研究、そして今日重要視されているのが教育普及活動である。その三つの仕事が互いに重なりあっているのが特徴である。(田辺)
- ② 資料収集から保管までの作業は、収集、分類、整理、保管という流れになる。また保管の中には保存・管理という意味あいが含まれており、収蔵より意味が広い。しかしながらその方法は各学問分野によって、また各博物館や研究者によって異なっている。(田辺)
- ③ 調査・研究は博物館学芸員おこなう基本的な作業で、博物館でのすべての作業にかかわる問題である。地域博物館に勤務する学芸員にとっては、自分の専攻している分野のみならず、隣接分野の研究も要求され、さらに基礎から応用まで広い範囲でおこなうことが要求される。(田村)
- ④ 教育普及活動は学校教育、社会教育、家庭教育に対応するもので、今日的には生涯学習にかかわる問題である。その中心になるものは展示、及び図録作成等があげられるが、博物館が行なう自然、歴史、民俗等にかかわる種々の催事もまた、地域社会に住んでいる人々にとって大きな意味をもっている。(朝岡)

〈教材制作の方向性について〉

- ① 博物館学芸員の仕事は多様であるから、その全貌が理解できるようなものが何本かあっていい。(田村)
- ② 博物館学芸員の仕事に関する全体構成を提示することが必要である。全体で何本くらい制作可能であるか、その中から最初は何を出していくか、全体の中で今回の教材がどの位置を占めているか提示する。全体構成の一つの方法として、博物館実習の前提講義としての教材という考え方もある。(田村)
- ③ 博物館に関する仕事は多様であるから、教材制作の方向性を一つに絞ったほうがいいのではないか。たとえば、現在の博物館とその仕事を肯定したうえで教材化していくのか、また博物館のあるべき姿、つまり理想的な姿を追っていくのか、選択があるように思う。(山口)
- ④ 博物館実習の前提講義としての教材をつくる場合は、実験的映像を加えることによって、今までなかった視点を加えることができるか。また考古学、歴史学、民俗学等、人文科学系の学問をつないでいくような教材制作が可能であるか、教材の質を問われる問題である。(田村)
- ⑤ 教材の内容は事典の項目の映像化であると考えていいのではないか。それが蓄積されてくると、教材としての利用価値が高まっていく。事典の項目とは、研究者の間である程度の共通認識があり、その中で新たな問題の発見、問題提起のできるものがあり、制作者の意図をだしていけるものが好ましい。(田村)
- ⑥ 資料化をしていく場合、多角的な視点でものを見ていくことが大切だ。一つの年中行事を例にとってみても、いくつもの要素をもっている、それぞれの方向からの収録

が必要である。祭事に使う有形文化資料、行事の式次第、音、舞などの無形文化資料、式次第、献立表などの文書資料、そのほか行事を支えてきた人間関係などがあり、これらが総合されて行事がなり立っているからだ。(山口)

- ⑦ そのような意味で、目に見えるものや現在残っているものを中心に成立している現在の博物館の仕事が、問われているように思う。一方では博物館の存在は人間性喪失の過程であるとも考えることもできる。いい意味でも悪い意味でもその国の、そしてその地域の文化を体系的に資料化して、公開すべきではないか。(山口)

〈教材の内容について・学芸員の基本的仕事〉

- ① 資料収集から保管までの作業は、収集、分類、整理、保管が含まれる。分類と整理を同じ項目にしなかったのは、自然科学、人文科学の各分野によって分類の仕方が異なり、専門的な仕分けが必要になるからである。また分類方法は館によっても独自の方法をとっている場合が少なくない。また保管という作業の中には保存・管理という意味あいが含まれており、単なる収蔵より意味が広い。博物館の重要な作業の一つである補修、燻蒸、脱塩等の作業は保存の中に含まれる。(田辺)
- ② 調査・研究は博物館でのすべての作業にかかわる問題で、学芸員にとっては基礎から応用まで広い範囲で行うことが要求される。調査研究については具体的な方法を提示することはもちろんであるが、調査する側(学芸員)のマナー、調査の作法を身につけることが大切である。たとえば聞き書きする場合話者よりも視線を低くすること、また話者の都合に合わせて行動するなど、細かな心配りや細かい点に注意する。(田辺)
- ③ 博物館の仕事のそれぞれの工程を追っていくことは、時間のかかる作業である。たとえば調査や資料の実測に関しても用意すべき道具がたくさんあり、ひとつおりの道具の使い方やその意味を説明する必要があるのではないか。調査時の写真の活用に関しても多くの伝えるべき要素をもっている。(田辺)
- ④ 今年の夏は伊豆の城ヶ島で御舟歌の調査を計画しているので、それを学芸員教材に活用できるのではないか。資料の収集、蓄積、保存が地域博物館の重要な仕事であるから、この作業を教材としてつかうことは問題はない。作業の手順として考えられることは、御舟歌の収録、御舟歌をとまなう民俗行事、時代背景等の調査、資料整理、再生、報告書作成、もしくは研究紀要への発表、さらに一般公開の方法を考え、地域の共有財産にする。また他地域の舟歌との比較研究を行うことによって、研究を深めていく、という手順になると思う。(田辺)
- ⑤ 教育普及活動は学校教育、社会教育、家庭教育に対応するもので、今日的には生涯学習にかかわる問題である。その中心になるものは展示、及び図録作成等があげられるが、そのほかに博物館が行う種々の催事もまた大きな意味をもっている。種々の催事とは自然観察会、民俗探訪の会、公開講演会、実技・実演会などが含まれる。(田辺)
- ⑥ 資料収集は博物館の基本的な作業の一つであるが、博物館の役割として貴重な文化遺産の資料収集と、展示に必要なものを収集するという二通りの考え方があり、どちらも重要な作業である。そして資料を上手に集めることはそれなりの技術を要するが、学芸

員の資質にかかっている場合が多い。(田辺)

- ⑦ 博物館の資料収集の方法には二とおりある。一つはテーマを決めずにもらえるものはもらうという考え方、もう一つはテーマ性をもって集めることである。(田村)

〈資料学について〉

- ① 資料館学（博物館学）は存在しているが、資料学が確立されていないことが問題だと思う。資料化という作業と研究とを分けてしまうことはできない。たとえば古文書の裏打ちをする場合、その技術をもっているからといって経師屋に任せておくことはできない。古文書が読めること、また各時代の文書様式を知っていることなどが裏打ち作業の条件になるからである。また作図をする場合も、その道具がもっている背景を知っておく必要がある。道具を製作し、使用するには必ず技術がともなっており、その背景がわかっていないととんだまちがいを犯すことになるからだ。そこで作図することの意味を充分議論する必要がある。道具（資料）を写し取るのであれば、写真のほうがよく正確である。(山口)
- ② 資料の保存・管理と資料化することとは違う。資料化するということは、現在なくなっている資料をも含めて、の資料化を意味している。たとえば大工が家を建てる時は、いわゆる大工道具以外に実に多くの定規を使うが、職人さんはそれらのすべてを道具として残すことはしない。しかし家を建てる時はなくてはならない道具の一つであり、收藏し、資料化する必要がある。たとえばさまざまな刃物は収集するが、砥石を系統的に集めているところが少ない。(山口)
- ③ 道具を見ていくことで何がわかってくるか。現在なくなっている資料を含めて道具を体系的にとらえていくことで、製作技術の流れ、道具を使う技術、技術の伝承、生活の歴史や広がりなどを、とらえられるような教材をつくってみたらどうだろうか。(山口)

〈教材の内容：展示について〉

- ① 博物館の仕事はいろいろあるが、その主たる使命として展示があげられると思う。展示計画をたてるためにはテーマ性がなければならない。その地域の特性を生かしたテーマをもっている博物館が好まれているし、またそのほうがはるかに多い。したがっていくつかのテーマを設定して、焦点を絞り込んでいくことのできる考え方が好ましいのではないか。そのためにはテーマ性をもった調査研究が必要であり、学芸員にはそのための基本的な、かつ広がりをもった学問、また幅広く比較できるような考え方が要求される。博物館学芸員にとって、展示は図録作成とともに研究成果の発表の場であるのだから。(田村)

〈教材制作の姿勢について〉

- ① 博物館学芸員の仕事に関する全体像を把握し、その一つ一つの作業を映像化して教材として使用する。学芸員がおこなう一つ一つの作業が、なぜ必要なのか、また、全体像の中で今回の教材がどの位置を占めているか提示する。(朝岡)

- ② 従来の博物館活動を基礎において、博物館が果たすべき新たな役割に関して、教材化の方向を考える。(朝岡)
- ③ 博物館学芸員の教材製作は放送大学教材とは異なり、素材を中心に構成する。そのため担当講師はおかず、現場での記録作成を主な作業として、解説が必要である場合は、現場での学芸員のコメント程度にとどめる。また一般大学での講座で活用できる教材であると同時に、地域博物館、地方自治体の教育委員会でも活用できる教材に仕上げたい。(教材)
- ④ 教材製作にあたって、研究者の間である程度の共通認識があり、その中で新たな問題の発見、問題提起のできるものがあり、制作者の意図をだしていけるものが好ましい。(教材)
- ⑤ 博物館内での作業と同時に、地域社会に向けての活動、博物館どうしの提携等、博物館の役割が広がっている。見学者や地域社会の住民の立場にたった博物館活動、という視点についても配慮していく。(朝岡)

(3) 教材制作のテーマに関する提案

1. テーマ試案(1)

以上のような議論の末、次の段階としてどのようなテーマを教材として扱ったらいいか、という問題に移る。幅広い役割をもっている博物館学芸員の仕事のなかで、教材になりうるテーマ、そして教材として役立つテーマを絞りこんでいく作業である。

- ① 教材のテーマを設定するとき、学芸員講座の幹にあたる部分を中心にするか、枝葉にあたる部分を中心にするか、あらかじめ設定しておく。
- ② 幹にあたる部分、すなわち博物館学、歴史学、民俗学、考古学等の学問の本質にかかわる問題について、また幅広い教養、深い知識の習得等、博物館学芸員が供えておくべき資質について、テーマにすることはむずかしい。
- ③ 特定の研究者の調査方法、思考方法、理論など、また特定の博物館の考え方などをテーマにすべきではない。
- ④ 枝葉の部分は、博物館学芸員がおこなう作業と手続き、それにともなう研究活動等を意味するが、これに関してはテーマにしやすいのではないか。作業や手続きについては、その意味付けをおこなう。
- ⑤ 大学での授業との組み合わせ、また授業を補うかたちで映像教材を活用できると、使いやすい教材になるのではないか。
- ⑥ 資料学(史料学)の段階でテーマにしたい問題がたくさんある。
- ⑦ 歴史系の博物館(歴史、民俗、考古)の共通した問題をテーマとして考えることができれば、幅広い使い方ができるのではないか。
- ⑧ 教材であるから、教えるとか、教育するなどというかたちを取ると、型にはまってしまふ恐れがあり、創造性が乏しくなる。したがって素材をみせて学生に考えさせるという教材にしたほうがいい。

以上のような様々なテーマに関する提案がなされた。これらの提案にそって教材の大きな枠組みを決めていった。その大意は次のようなものである。

④で述べているように、学芸員がおこなう諸作業、そしてそれにとまなう研究活動を軸にして、その手続きをできるだけ具体的に映像に収め、教材化していく。つまり、調査、資料収集、資料整理、資料管理、展示等の作業が現場の博物館でどのような形でおこなわれているかということが、学芸員の資格取得をめざしている学生にとって、関心が深いのではないかと考えられ、その作業手順や手続きについてできるだけフォローしていく。そして、重ねて強調しなければならないことは、いずれの作業においても調査・研究活動がとまなない、学芸員の本来の仕事は調査、及び研究の部分であることを表現することを申し合わせた。映像化していく手がかりを④に求め、それに②を組み合わせた形での案である。

⑤については、教材制作における有力な方法で、30分、45分といった長い時間の単位で問題を考えるのではなく、作業手順や手続きを5分、10分の短い単位でまとめ、教育現場の教師が必要とする映像を提供しようとするものである。講義では説明しにくいもの、できないものを映像化し、教師の解説と組み合わせる形で授業をすすめていく、という方法である。この方法をとるとCD-ROM化することによって、さらに使いやすくなる。しかも予備調査によると、現場の教師のなかには、このような教材を必要としているケースが少なくなかった。

また、⑥については神奈川大学の山口徹先生の意見である。その内容はすでに述べたように「現在の日本では資料館学（博物館学）は存在しているが、資料学がないことが問題であり、資料の保存・管理と資料化を進めていくこととは、その仕事の質が異なる。どの分野においても資料に対する知識とその背景がわかっていないと、とんでもないまちがいを犯すことになる。また資料化するということは、現在なくなっている資料をも含めて収集、保管することを意味しており、したがって資料化という作業と研究とを分けてしまうことはできないということである。

また資料化をしていく場合、多角的な視点でものを見ていくことが大切であり、一つの年中行事を例にとってみても、いくつもの要素をもっているのもので、それぞれの方向からの収録が必要である。祭事に使う有形文化資料、行事の式次第、音、舞などの無形文化資料、式次第、献立表などの文書資料、そのほか行事を支えてきた人間関係などがあり、これが総合されて行事がなり立っているからだ」ということであつた。

この意見も単に資料整理、保管という作業行程を追いかけるだけではなく、資料の背後に存在している意味について、充分検討をする必要があること、また民具（有形民俗資料）をとおして生活の歴史を扱う場合、もうすでになくなっているものがかなりあり、なくなっているものを含めて資料として扱う必要がある、と述べている。それは、生活というものは単品で成り立つものではなく、とくに生活用具はセットで成り立っている場合が多いからである。また、多角的なものの見方をする、という意見も資料学という学問を成立させるためには欠かせない要素になる。これらの意見も、学芸員の主要な仕事は調査研究にある、という意見に重なるものであろう。

⑦、および⑧についてはたいへんむずかしい問題が潜んでいる。たとえば歴史学、民俗学、考古学、といった社会科学の分野については、それぞれの分野について共通した問題につい

てとりあげ、幅広い使い方ができる教材制作が提案されている。この提案はより効果的な授業をすすめていくことができるというだけでなく、博物館学芸員がおこなう最も基本的な仕事は何であるのか、また人文科学系の学問の底に流れている本質的な要素は何であるのか、といった問題を見きわめていくという大きなテーマをかかえることになる。

また「教えてあげる」という姿勢ではなく、「問題を提起し、学生が自ら問題解決していく」姿勢で制作をおこなうという提案も、教材の性格を明らかにし、その方向性を定めていく上で重要である。

しかしながら、開発当初からこれらの問題をすべて満足されるような教材の研究開発はむずかしい。したがって、ここで提案された問題を常に頭におきながら、制作を進めていくこと、そして制作した教材はさまざまな角度から評価調査をおこない、調査結果を尊重しながら次の教材制作をおこなうことを確認事項とした。提案された試案は次の通りである。

2. テーマ試案(2)

- ①有形民俗資料の収集とそれにとまなう調査活動
- ②資料の収集、搬入、洗浄、勳蒸、補修、保管にかかわる作業とその意味づけ
- ③資料の整理、作図、カード化にかかわる作業とその意味づけ
- ④民俗芸能、祭、年中行事など、無形民俗文化財の記録とそれにとまなう調査記録の方法論
- ⑤有形民俗資料、および無形民俗資料の展示方法論
- ⑥ジオラマ製作過程の記録とその意味づけ
- ⑦博物館の常設展示、及び企画の方法
- ⑧日本の博物館と世界の博物館紹介
- ⑨博物館のできるまで

①から④までは有形民俗資料の収集、整理、管理に関する作業とその意味づけについての提案である。博物館学芸員養成のための教材では、調査・収集時においては、対象になる資料の確認、その調査方法、調査に必要な用具、調査の姿勢等について、具体的に、そして丁寧に追っていくことが必要であり、また資料整理、資料保管、展示等の作業においては、その手順を具体的に追っていくことが必要である。その過程のなかで、その作業をする目的、意味、博物館存在の目的である展示、教育活動にいかにつながっていくか、また研究職としての学芸員の研究分野をいかに広げ、いかに深めていくことができるか、つかみ取れるような素材の提供があることが望ましい。

⑤から⑦までは展示についてのテーマであるが、展示は学芸員の日常の調査・研究の成果を表現する場であり、研究者における研究論文と同じ意味をもっている。そればかりでなく、先に示したように展示は、博物館と地域社会を結ぶ役割を果たすものであり、博物館の重要な役割の一つである社会教育（生涯学習）の場として広く活用される。したがって、展示方法論は学芸員にとって必ず修得しなければならない技術である。展示には常設展示と企画展示、特別展示などに分けられるが、この教材では企画展示を扱うことにする。

⑧、⑨については、〈教材制作の方向性について〉の項で述べた「博物館学芸員の仕事は多

様であるから、その全貌が理解できるようなものが何本かあっていい」「博物館学芸員の仕事に関する全体構成を提示することが必要である。全体で何本くらい制作可能であるか、その中から最初に何を出していくか、全体の中で今回の教材がどの位置を占めているか提示する」といった意見に対応するもので、時間的、予算的余裕ができたらずび試みてみたい問題である。

3. 教材制作の姿勢

先に述べたように、この教材制作は平成5年度が初年度であったため、博物館学芸員がおこなう基本的な作業で、しかも重要な作業を優先的に取り上げることにした。平成5年度当初は無形、及び有形の民俗文化資料の調査と収集に関する2つのテーマを設定した。その理由は、博物館の活動として地域に残る資料の調査と収集は基本的な仕事であり、収集した資料を整理、保管し、一般公開の方法を考え、地域の共有財産にすることを目的とした博物館本来の仕事へとつながっていくからである。

そこで以下に示したような構成原案を作成した。無形民俗文化資料「伊豆城ヶ島のお舟歌の収集と調査」は、研究協力者としてこの教材制作にさまざまな角度から提言をしてくださった田辺悟先生（横須賀市立自然・人文博物館館長）のご配慮によるものである。また、有形民俗資料「仕事着の収集と調査」は、同じく研究協力者の田村善次郎教授（武蔵野美術大学）の提案によるものである。

そのほか、試案として静岡県小山町、及び御殿場市、山梨県上野原町の事例をかかげた。万一、上記の計画に支障が生じたときに不安がないように、そして素材の取扱の比較、地域の比較等、幅広く試案を用意しておいた方がいいのではないかと考えたからである。

有形民俗資料の素材の一つとして仕事着を選んだのは、このテーマがたいへんむずかしいテーマであったからである。放送教育開発センターのような所で制作する教材は、博物館の事業や大学の授業で取り上げることの少ないむずかしいテーマを選定し、その方法論を構築し、方向性を示していくことが役割であると考えたからである。その点仕事着は、調査、収集、計測、保存、展示などがむずかしい民具の一つで、そのためたいへん重要であるのにも関わらず、これを取り上げる学芸員や研究者が少なく、貴重な資料が消滅しているのが現状であった。さいわい武蔵野美術大学の民俗資料室には、この分野を得意とする学芸員がいて、活発な活動をしていたことが心強い背景になっていた。

また、無形民俗資料に関しても、仕事着との同様の傾向がみられた。やはりこの分野を専門とする学芸員が少なく、博物館の仕事として積極的に取り組んでいる事例が少ないのである。この教材制作を契機にして現場の先生や学芸員が、取り組みにくいテーマを積極的に取り上げることは、教材を研究開発する姿勢として必要な条件の一つであろう。

制作上の方針としては、素材（資料そのもの、もしくは学芸員がおこなう作業）を中心に構成することにする。この方針により、放送大学の放送教材の制作でおこなっているような担当講師はおかず、現場での記録作成、及び研究室や博物館での作業を主な作業として、解説が必要である場合は、学芸員のコメント程度にとどめる。「学生が自ら問題を発見し、問題解決の方法を探る」という方針にできるだけ近づけるような教材を、理想的な形としてイメ

ージした。

また一般大学での講座で活用できる教材であると同時に、地域博物館や地方自治体の教育委員会等でも活用できる教材に仕上げる、ということを制作上の条件として設定した。

4. 構成試案の作成

(1) 無形民俗文化資料「伊豆城ヶ島のお舟歌の収集と調査（案）」

① お舟歌の収録（城ヶ島）

収録、及び調査時のマナー、調査の作法、収録に必要な機器類。

② 御舟歌をとまなう民俗行事、時代背景等の聞き書き調査、また民俗行事の中でどのような形で歌われているか、その映像を撮影することができるか、すでにあるものを借用できるか、検討する。

③ 資料整理・再生（研究室）

整理・再生のポイントと必要な機器類。

④ 資料の保管と一般公開の方法

(2) 有形民俗文化資料「仕事着の収集と調査（案）」

① 仕事着の製作と保守管理に関する技術と工夫（於町田市、または東大和市）

反物の裁ち方、縫い方。

糊つけ、洗い張り、縫い返し、長持ちさせる工夫。

仕事着の再利用（裂き織り、虫よけ、雑巾等）。

② 仕事着に関する調査（於町田市、または東大和市）

時代的背景、当時の生産活動とのかかわり。

仕事着の実測調査と実測用具、実測の目的と意味。

③ 仕事着の保管と展示（於武蔵野美術大学）

一般家庭における衣類の使用、保管管理に関する工夫を、博物館での展示や保管に役立てる。また博物館の収蔵庫のあり方、保管のための容器のあり方、展示方法について考える。

(3) 無形民俗文化資料の調査と収集

①撮影対象地：5月下旬に正式決定

（例）静岡県駿東郡小山町、または御殿場市古沢。

②撮影目標：

8月から9月に行われる主要な行事を取り上げ、博物館では取扱いがむずかしいとされている無形文化に関する教材作成を行う。

（事例）風祭り（8月31日～9月1日）または

大祓い（6月29日～30日、12月30日～31日）

（目的）地方で行われている小規模な行事の中に、どのような意味が込められているか、またその記録の方法、資料収集の方法を示し、展示や実習に生かす。

③撮影のための記録作成作業：

行事の準備と内容

風祭り（注連縄づくり、山登り、山上での神事、直会、下山）

大祓い（注連縄、人型、芽の輪づくり、境内の清掃、神事、輪くぐり、直会）

行事で用いた用具の調査、記録、収集（有形民俗資料と同じ手順を踏む）

行事の意味あいについての聞き書き。

用具の梱包と搬入。

(4) 有形民俗資料の調査と収集

①撮影対象地：

（事例）山梨県北都留郡上野原町西原 中川宅

②撮影目標：

撮影対象地の主要な生業にかかわる生産用具の調査と収集

（事例）畑作を中心にした農耕、収穫、調整用具（鍬、鋤、鎌、ブチボウ、脱穀機、水車等）を撮影の対象にする。

（目的）自然素材を利用した自家製民具、職人が専門的技術を使って製作したもの、工場生産物の購入品、常設されている設備等を取り上げ、その地域が持っている生産技術、交易の広がり、技術の広がりとその変化等を、生産用具をとおして理解を深め、展示や実習に生かす。

③撮影のための記録作成作業：

民具の収納状況のチェック

庭先に運び出す（生産用具をセットでみせる）

ラベル（荷札）の取り付け

聞き書き

民具カードの記入

現場での採寸、作図

使用状況の記録

用具の梱包と搬入

(4) 構成原案の作成

1. テーマの決定

以上4本のテーマが平成5年度の候補にのぼった。次の段階として構成試案の作成にとりかかることになるのであるが、この作業が始まったのがこの年の7月であった。構成試案から構成案を作成するまでには、実際に教材制作に協力してくれる博物館と学芸員の協力が必要であり、「調査と収集」に関してはフィールドワークが伴うために、現地で協力してくれるインフォーマントの協力が必要である。そして具体的な収録内容、収録日程、収録場所等の要素が確定しないと、その次の段階であるシナリオをつくることができない。

ところが、構成案を作成する段階で、無形民俗資料に関する教材制作がたいへんむずかし

いことがわかってきた。無形民俗資料は年中行事、民間伝承、昔話、伝説、歌謡、舞踊など、主として人間がおこなう行為が中心になり、その行為は時間とともに形態が変わり、目にみえる形としては残らない。しかもそのような無形民俗資料を記録、保存し、博物館の事業として積極的に取り組んでいるところが少なかったからである。

今回、横須賀市自然・人文博物館で準備をしてくださった「伊豆城ヶ島のお舟歌」に関しては有力な候補として具体案の作成に時間をかけたが、結局教材にしていくにはいくつかの問題がうかびあがってきた。それは民俗学の研究としてはたいへんいいテーマであったのだが、博物館学芸員の教材としては適当ではなかったことがわかってきた。「資料の調査と収集」「資料整理」まではできても、「展示」の段階になると方法論が見つからなかったのである。

当初から予測していたように、無形民俗文化については方法論から構築していかなければならない状況であった。そこで再検討をした結果、無形民俗資料に関しては、もう1年間の研究期間をおき、平成6年度に計画し、制作することにする。そこで、今年度は「仕事着」を中心にして制作を進めていくことになった。そして田村善次郎教授をこの教材の監修者をお願いした。

教材の枠組みの決定、テーマの選択、構成原案の作成までが筆者の主要な役割であり、次の段階からはディレクターにバトンタッチをする。ディレクターは構成原案をもとにしてシナリオ制作にかかり、より具体的な場面構成を作り上げ、収録に関するスケジュールを決定していく。この作業に関しては制作部の福田ディレクター、及び教材研究部の福井教授が担当した。その内容は第3章、第4章で報告したとおりである。

以下、有形民俗文化資料「仕事着の収集と調査」に関する構成原案、及び収録スケジュールについて資料を提示する。構成原案では教材の最初と最後に監修者が登場し、博物館と学芸員の仕事の全容、そして教材制作の目的についてのコメントがあり、最後に仕事の意味あいについて、博物館や学芸員の役割についてコメントする形式になっている。また、重複するかも知れないが、担当講師をたてて講師の解説によって授業を進めていくのではなく、学芸員がおこなう作業を丹念に追い、その意味を考えていくという方式をとることにした。

なお、平成5年度は有形民俗資料の調査と収集、資料整理の2本を制作し、平成6年度は有形民俗資料の展示を1本、そして無形民俗関係の教材を3本制作した。構成原案の作成に至るまでの手順については、第1作目とほぼ同じような手続きを踏んでいる。煩雑になるので、ここでは「有形民俗資料の調査と収集」だけを取り上げた。また、この教材ビデオに出演した武蔵野美術大学の学芸員である宮本八恵子さんが、より具体的な構成原案を作成してくれたので、その構成案も資料としてかかげた。民俗学系学芸員の仕事の全容が理科できるように工夫されている（P.26～28）。

また、無形民俗資料に関する方法論については、その分野において、わが国でも最も積極的に研究活動を進めている埼玉県立民俗文化センターの学芸員の方々と議論を続け、平成6年度に教材制作を進めてきた。しかしながら、まだ確信のもてる域に達していない。今後の課題にしたい。

2. 有形民俗文化資料「仕事着の収集と調査」の構成原案

1993. 7. 1

「仕事着の調査と収集」構成原案

| 映 像 | 音声・内容 |
|--|--|
| ①タイトルシーン | <p>* 多種多彩な仕事着</p> <p>武蔵野美大に収蔵されている仕事着のうち、代表的なものを数点～十数点を紹介し、仕事着の全体像を示す</p> |
| ②田村先生の話 | <p>* 博物館の役割と仕事着収集の意義</p> <p>民具は硬質素材と、軟質素材を使ったものに分かれるが、仕事着をとおして日本の軟質物質文化の特性を語り、資料の調査、研究、収集、保管、展示等の活動を行う博物館の役割について語る</p> |
| ③学芸員Aさんの話 | <p>* 有形文化資料収集の作業手順の説明</p> <p>保存状況の調査、着用・保守管理に関する調査</p> |
| (ワイプ) | |
| ④学芸員Bさんと打ち合わせをするAさん | <p>* 調査の事前打ち合わせ</p> <p>調査項目・内容・取材場所の確認</p> <p>* 調査のために必要な道具の説明</p> <p>民具カード、野帳、製図用具、計測用具等</p> |
| ⑤仕事着の収録・調査中のAさん、調査に立ち会って記録をとるBさん 質問に答える保管者Fさん | <p>* 仕事着の製作と保守管理に関する技術と工夫（東大和市）、反物の裁ち方、縫い方糊つけ、洗い張り、縫い返し、長持ちさせる工夫仕事着の再利用（裂き織り、虫よけ、雑巾等）</p> |
| (インサート) | |
| ⑥工作中的農夫（職人） | <p>* 仕事着が実際に使われている様子を映像で表現する。仕事着がいかに機能的につくられているか、また一般家庭において、いかに合理的に保守管理されているかを映像で表現する</p> |
| ⑦仕事着の保守管理 | |

⑧調査結果の整理作業を
するAさん、Bさん

*記入されたカードと現物との照合
*民具カードと実測図の修正、補完
*整理に必要な道具等

(ワイプ)

⑨学芸員の皆さん

*採集した資料の活用について

⑩田村先生の話

*有形民俗文化の保存
*地域の共有財産、一般公開について
*研究活動、比較研究について

〈監修者の話（はじめに・3分）〉

- ① 民具（有形民俗資料）は硬質素材と軟質素材で作られたものに分けることができる。軟質素材は天然の繊維素材、ワラ、衣料用素材等が含まれる。特別な修業をしなくとも代々家庭の中で、また近隣社会の中で製作技術やその扱い方が伝承されてきたものである。一方硬質素材は鉄、石、木などの素材をいい、主として専門の職人が作ったもの。
- ② 今回は軟質素材のうち仕事着を選ぶ。それは博物館のなかで比較的扱いにくい分野であり、調査、収集、整理作業が遅れていると考えたからである。仕事着という有形民俗資料の調査収集を行うことは、衣服の調達、着用、管理という衣生活のメカニズムを具体的に明らかにするとともに、仕事着をとおして「日本の軟質物質文化」の特性を語り、資料の調査、収集、研究、保管、展示等の活動を行う博物館の役割について追いかけていくのが、今回の教材製作の目的である。

〈監修者の話（まとめ・4分）〉

- ① たいへん地道な仕事であるが、民俗文化財を調査・収集・整理・保管し、それを一般に公開することは、地域に根ざした博物館の重要な役割である。民俗文化財は個人が所有しているものが多いが、それを資料化していくことで地域の共有財産になりうるものであり、その保存と一般公開を行なうために、調査・収集欠かすことのできない作業である。
- ② さらに博物館学芸員にとっても重要なことは調査・研究活動である。学芸員が行う調査・研究は二通りある。その一つは資料収集のために行う調査で、資料の持つ意味や資料の所在等を調査する。もう一つは地域調査や収集された資料をもとにして、地域の生活、技術やものの交流などを明らかにする。それが博物館の役割や機能を発展、充実させていく大きな要素になる。

3. 制作スケジュール

7月5日（月）

「有形民俗資料の調査と収集の仕事着を中心にしてー」

原案作成、監修者田村善次郎先生と内容、構成の打ち合わせ（武蔵野美術大学）

7月13日（火）

「有形民俗資料」原案（別紙）の提出、内容説明（教材研究室会議）

7月14日（水）

「有形民俗資料」学芸員との内容、構成打ち合わせ（埼玉県所沢）

7月27日（火）

「有形民俗資料」第二次構成案の提出、内容説明（教材研究室会議）

7月～8月

「有形民俗資料」武蔵野美大学芸員、及び田村先生と構成案をやりとりしながら、構成案をより具体化する。

9月～10月

「有形民俗資料」武蔵野美大民具収蔵庫、及び調査地のロケハン
シナリオの作成

「無形民俗資料」構成原案の作成

11月～12月

「有形民俗資料」の収録

1月～3月

「有形民俗資料」の編集・完成

「無形民俗資料」構成案の具体化